

近畿産業考古学会

The Kinki Industrial Archaeology Society

第136号

目次

1. (株)ヒラカワ滋賀事業所 ボイラ展示と
工場の見学会・・・1
2. 学会誌『近畿の産業遺産』第18号 原稿募集・・・2
3. 2024年度総会(予告)・・・2
4. 2023年度年次大会見学会報告・・・寺島俊之・・・2
5. 2023年度年次大会行事報告・・・寺島俊之・・・3
6. 海軍操練所跡第一次調査現地説明会に参加して
・・・寺島俊之・・・4
7. 「鉄道と考古学-奈良の歴史をつなぐ-」(檀原考古学
研究所附属博物館)の展示見学・講座に参加して
・・・二階堂達郎・・・5
8. 【出版物紹介】『絵葉書で訪ねる近畿地方の橋』
・・・6
9. 学会誌の電子ジャーナル公開について・・・6
10. 2023年度第4回役員会議事録・・・6
11. 2023年度第5回役員会議事録・・・6
12. 入会者・・・6

ヒラカワ滋賀事業所 ボイラ展示と工場の見学会

蒸気ボイラは、T.ニューコメンやJ.ワットらによる蒸気機関の発明、その後の蒸気動力技術の発展と並行する形で発展してきました。現在、丸ボイラ(炉筒・煙管・炉筒煙管など)水管ボイラ(自然循環式、強制循環式、貫流など)、特殊ボイラ(鋳鉄製など)など多くの種類があります。発電所や船舶のほか、食品・醸造・化学などの工場で動力、洗浄・滅菌、給湯・暖房などの用途で広く使われています。

わが国のボイラ製造は、その草創期には、三菱(資)神戸造船所、大阪鉄工所、汽車製造などの大手企業が進出しま

したが、1900年代に入ると、個人経営の専門メーカーが相次いで創業します。(株)ヒラカワ社はそのひとつで、1912(明治45)年、本社所在地(現・大阪市北区大淀北)で平川鉄工所として創業しました。

同社の滋賀事業所は、1962(昭和37)年、ボイラ用生産工場として開設されました。敷地の一角に、約10点のボイラが展示されています。いずれも技術的・歴史的に貴重なもので、うち3点(コルニッシュ型ボイラ、三胴式水管ボイラ(HL-小型3胴水管ボイラ)、立型ボイラ(平川堅型ボイラ)が「産業技術史資料データベース」(国立科学博物館・産業技術史資料情報センター)に掲載されています。今回、これらを見学させていただくとともに、工場の製造現場も見学させていただきます。

生産ラインは、資材の切断→加工→溶接→煙管取付・拡管組立→水圧試験→組立・装備→完成検査・試運転からなり、主要な加工機械として、レーザー切断機、プレス機(1000t)、モリソン加工機などが備えられています(会社パンフレットによる)。

開催日：3月6日(水)

集合：JR東海道本線(琵琶湖線)「野洲」駅・改札口、12:50

※「野洲」駅着12:43の新快速があります(所要時間は「大阪」駅から約1時間です)。

見学対象と行程：

会社のご厚意により社有バスで送迎していただきます。

・株式会社ヒラカワ滋賀事業所：

①ボイラ展示、②工場製造ライン

資料代：500円

参加希望者は2月29日(木)までに、事務局宛にメールかFAXにてお申し込み下さい。



写真1 コルニッシュ型ボイラ(撮影:二階堂, 2023/11/10)
1880年代, 東京電燈を皮切りに各地で電灯会社が設立され, 火力発電を始めた。その頃の国産製品。



写真2 立型ボイラ(1952(昭和)27年製, 撮影:二階堂, 2023/11/10) 効率は低いが据付面積が小さい。



写真3 炉筒煙管式ボイラ(撮影:二階堂, 2023/11/10)

2024年度総会(予告)

近年, 高輪築堤跡や海軍操練所跡など近代遺跡の発掘が話題を呼んでいます。芦屋市では, ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅, 重要文化財)敷地内で発掘調査が行われ, 温室, 渡り廊下, 滝や池などの遺構が発見されました。今総会では, 近代の埋蔵文化財調査と近代化・産業遺産調査とのかかわりに焦点を当てて, 講演と見学を開催します。

また, ヨドコウ迎賓館(1924(大正13)年築, 設計:フランク・ロイド・ライト)は保存修理工事(2016年着工)を終えて, 2019年2月に一般公開を再開しました。この工事の解説をいただきながら, 同館の見学も実施する予定です。

開催日: 4月20日(土), 13:30~

会場: 大手前大学・史学研究所

特別講演: 竹村忠洋氏(芦屋市教育委員会 生涯学習課)
(講演タイトル未定。ヨドコウ迎賓館敷地内の発掘調査と芦屋市の近代化遺産を中心にご講演いただきます。)

見学先(予定): ヨドコウ迎賓館と敷地内発掘現場, 芦屋川水車場跡・官設鉄道芦屋川隧道跡・芦屋仏教会館など。詳細は次号でご案内します。

2023年度年次大会見学会報告

寺島俊之

12月2日(土)に開催された2023年度年次大会の関連行事として下記を実施した。

集合場所: 京阪本線墨染駅 集合: 9:30 参加者: 15名

【墨染地区】

- ①墨染橋・出雲橋
- ②鴨川運河・伏見インクライン跡
- ③津田電線伏見工場跡

移動(墨染駅10:31発に乗車, 三条駅経由で蹴上駅まで)

【蹴上地区】

- ④第二期蹴上発電所(外観)
- ⑤琵琶湖疏水記念館特別展見学(11:25~11:50)

【墨染地区】

京阪本線は三条駅から七条駅までが1987(昭和62)年に完成した地下線であるが, 地上に出ると墨染駅付近まで鴨川運河沿いを走行する。午前中の見学会は墨染駅から伏見インクライン跡周辺を約1時間で巡るコースであった。

徒歩数分で鴨川運河に到着し墨染橋から出雲橋を経て伏見上船溜跡まで歩く。どちらの橋も舟運を考慮して橋桁が水面より高い点に特徴がある。

鴨川運河は竣工時には幅員約6mで水深約106cmであったが, 1912(明治45・大正元)年の改修によって幅員約12.7m, 水深約242cmになった。このため鴨川運河に現存する30の橋梁すべてが1919(大正8)年以降の架設である。

古い橋には水利徽章である五芒星や六芒星が設置されており, 出雲橋にも六芒星を確認できる。(選奨土木遺産「琵琶湖疏水鴨川運河施設群」(2019(令和元)年)。

学会誌『近畿の産業遺産』第18号 原稿募集

『近畿の産業遺産』第18号の原稿を募集します。多くの会員の投稿をお待ちしています。諸事情により, 第17号の発行が大幅に遅れていることをお詫び申し上げます。

・投稿申込の締切日:

調査報告・研究ノートなど, 論文以外; 2024年2月28日(論文(査読付き)は受付を終了しました。)

国道24号のアンダーパスを通る。同国道は伏見インクライン跡に建設された。同インクラインは全長291mで高低差は14.8mであった。完成は1895(明治23)年であるが舟運の衰退によって1943(昭和18)年に運用休止。1960(昭和35)年には軌道も撤去されて国道に改修された。廃止後は大規模な整地が実施され、軌道と立体交差した伏見橋は道路交差点になった。東西に走るインクラインの南側の広大な敷地には、津田電線(株)伏見工場があったが、1967(昭和42)年に廃止され、移転した。同工場では鴨川運河から水を引き込み、16基の水車(1926(大正15)年時点)を稼働させ、伸銅加工に使用していた。上船溜まり付近では、その水路跡が通路として残され、脇に「疏水」の文字が刻まれたコンクリート製角柱が立っているのが確認できた。

墨染発電所の引込水路に沿って出雲橋まで戻り、墨染駅から蹴上駅まで移動した。



写真1 墨染発電所取水口付近(撮影:寺島俊之)

【蹴上地区】

蹴上駅から琵琶湖疏水記念館に向かう。途中、第二期発電所の壁面に水利徽章である六芒星を確認した。



写真2 第二期蹴上発電所(撮影:寺島俊之)

琵琶湖疏水記念館には11:25に到着。資料研究専門員である久岡道武様より下記の特別展をガイドツアー頂いた。

◇文化庁移転記念・琵琶湖疏水記念館特別展

「フィールドミュージアム琵琶湖疏水」

鴨川運河の誕生ないだ水の路～

・期間:6月20日(火)～12月24日(日)

◇展示

第一章:鴨川運河の建設

第二章:鴨川運河の水利用

第三章:変化する鴨川運河

明治から昭和戦前期までの行政資料と古写真の展示が主である。鴨川運河は琵琶湖疏水から鴨東運河を経て大津

と大阪とを結ぶ重要な舟運区間であった。京都市では日本遺産(2020(令和2)年)への認定を機にパンフレット「そすいさんぼ」を配布する等、フィールドミュージアムとして整備を進めている。

ガイドツアーを頂きました久岡道武様にはお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

2023年度大会行事報告

寺島俊之

特別講演会

「鴨川運河の誕生～京都と伏見をつなぐ水の路」

講演者:久岡道武氏(琵琶湖疏水記念館資料研究専門員)

日時:2023年12月2日(土)13:30～15:00

場所:京都市国際交流会館第4会議室

参加者:16名+リモート2名

挨拶:中山会長 司会:岡田副会長 ホスト:貝柄幹事

近年、琵琶湖疏水は京都の近代化の基礎として歴史的価値が再評価されている。鴨川運河は琵琶湖疏水の一部で、鴨川落合から伏見区堀詰町までの約9キロの区間である。琵琶湖疏水完成後の延伸工事として計画されたが、実現に以下の紆余曲折があった。

- 1) ルート選定では、高瀬川に接続する案や堀川や天神川に接続する案もあったこと。
- 2) 経済情勢等の理由で工事認可と中止の市議会議決が繰り返されたこと。着工を求める北垣知事に対して、市議会は民力休養を求める意見や開発地域の東部偏重への批判が起こった。
- 3) 工事再開は政府に対する京都市の信用問題として決議されたこと。それは平安遷都千百年記念祭と第4回内国勧業博覧会の開催に支障を生じさせないためであった。

鴨川運河は舟運、精米、灌漑用水、伸銅業、水力発電に利用された。とくに昭和初期までは石炭や木炭の輸送路として重要であった。

現在は以下の3項目で高い評価を受けている。

- ①現役のインフラ施設であること。
- ②近代京都の基礎となった歴史的な遺産であること。
- ③疏水沿線の景観は地域活性化の新たな資源であること。

京都市では、琵琶湖疏水をフィールドミュージアムとして散歩道の整備や散策マップを作成している。

質疑応答の中で、京都府知事であった北垣国道と京都市議会との関係についての補足説明がされた。

研究発表講演会

- (1)「戦前における京阪電鉄と鴨川運河の地下線化計画」白木正俊氏(本会会員)(15:15～16:00)

白木正俊氏は、京阪本線の三条駅から七条駅までの、地下線化に至る経緯を調査した。その結果、実現は1987(昭和62)年であったが計画は1930(昭和5)年から存在していたことを講演した。

京阪本線地下化の目的は交通事故の減少や風致上の美化であり、時代による変化はなかった。しかし、鴨川大洪水後の1936(昭和11)年に策定された事業計画では、当該区間における鴨川運河を、舟運と水力から発電に用途変更した。これは鴨川運河の暗渠化によって、高低差を利用した水力発電所の新設が塩小路下流に計画されたことによる。

なお京阪本線の地下化と鴨川運河の暗渠化の実現までに長い期間を必要とした理由は、財政負担をめぐる京都市と京阪との対立問題であったと結論した。

(2)「鴨川運河と京都市電鴨川線・京阪本線」

中山嘉彦氏(本会会長, 大阪学院大学) (16:00~16:55)

中山嘉彦氏は、以下の三点を講演した。

- ① 開業時の五条(現清水五条)駅が1910年4月15日付『日出新聞』挿絵どおりであることを当時刊行された地籍図で証明し、その構造が今まで未開業の鴨東電車鉄道への乗入を企図していたためである可能性があること。
- ② 地上線時代における京阪本線の三条駅から七条駅までの区間は京都市電鴨川線であって、法的には京阪電車による市電乗入であり、1987年5月24日の地下化まで変更されていなかった可能性があること。
- ③ 開業後の三条駅周辺では大規模な家屋移転が三度あったこと。

現在の三条駅から七条駅までの地下線の所有者は京阪である。一方、京阪京津線の三条駅から御陵駅までの区間は京都市営地下鉄東西線に置換された。これは三条駅から七条駅までを京阪の所有にした見返りであった可能性もあると示唆した。



写真3 講演会の様子(撮影:寺島俊之)

海軍操練所跡第一次調査現地説明会に参加して

寺島俊之

神戸市は神戸港第一突堤北側の市有地において、幕末に開設された海軍操練所の遺構が発見されたことを2023(令和5)年12月に発表した。これは港湾施設が1868(明治元)年の開港以前から存在したことを示す歴史的な発見とされる。

市長会見を受け、一般市民向け現地説明会が年初に開催されたので参加した。参加者は1月13日と14日の2日間に30分の入替制で120人/回×10回=1,200人であった。

今回の調査は以下の3点で意義があり国重要文化財級との現地説明であった。

①神戸港の原点

開港以前の遺構発見は神戸港の歴史で初めて

②神戸港の発展を物語る重層的な遺構

近世に築造された防波堤を破壊せず活用した港湾施設の拡充を時代ごとに目視可能なこと。

③考古学的手法の活用

幕末までの港湾施設の発掘調査を考古学的手法で実施した事例は開港5都市(函館・新潟・横浜・神戸・長崎)で初めて。

神戸市文化財課による現地説明は以下の3ブロックで実施された。

①調査区を南西から俯瞰

②北側防波堤北側の様子

③信号所と下層の第1期石積みの様子

なお、歴史区分は以下である。

- ・第1期：開港以前(海軍操練所)
- ・第2期：開港時の築港遺構(第1波止場初期)
- ・第3期：明治中期以前の遺構(第1波止場の修築整備)
- ・第4期：明治中期以降の遺構(第1波止場の拡張整備)

今回の発掘調査では、発見された信号所の敷石と基礎から明治中期に撮影された第1波止場の写真との整合性が確認された他、当時の築港技術や石工技術の解明に迫る手がかりを得たという。

また、遺構全体の保存状態も良好で1995(平成7)年に発生した阪神淡路大震災による液状化等の痕跡は認められなかった。なお、見学会では要所要所に解説板が設ける等の配慮がなされ判りやすかった。

神戸市では遺構の現地保存と一般公開を検討中である。

■所在地：神戸市中央区新港町16

■配布資料：神戸市埋蔵文化財センターHP

https://www.city.kobe.lg.jp/culture/culture/institution/center/archive/gensetsu/kaigunsourennzyo_2024.pdf

■市長会見2023年12月26日

<https://www.city.kobe.lg.jp/a57337/shise/shichoshitsu/teireikaiken/r5/20231226.html>



写真1 北側防波堤(台形状)(撮影:寺島俊之)



写真2 出土品 (撮影:寺島俊之)



写真3 全景 (敷地東側から) (撮影:寺島俊之)

「鉄道と考古学-奈良の歴史をつなぐ-」(檀原考古学研究所附属博物館)の展示見学・講座に参加して

二階堂達郎

奈良県立檀原考古学研究所附属博物館で、特別陳列「鉄道と考古学 -奈良の歴史をつなぐ-」が、2023年12月16日から2024年1月14日まで開催された。2024年1月7日、研究所講堂で開催された研究講座に参加した。約150名の参加者があり、会場はほぼ満員であった。

講師は鈴木知美氏と北山峰生氏で、タイトルはそれぞれ「考古学と鉄道のつながり」と「鉄道の時代-近代奈良の考古学-」であった。北山氏は、本会の学習会(2014年9月27日、西宮市大学交流センター)で「煉瓦考古学試論-奈良県の事例を題材として-」と題する発表をされていた。

両氏の講演の主な内容は、奈良県内の鉄道と関連する発掘調査と、煉瓦構造物や煉瓦を中心とする遺構・遺物の調査・研究結果についてであった。とくに2005(平成17)年に、JR奈良駅周辺の平城京遺跡の発掘調査で出土した旧国鉄奈良駅の転車台とプラットフォームの遺構、および煉瓦と刻印についての考古学的分析・考察は興味深いものであった。その成果や遺物は特別陳列でも展示されていた。

従来、同研究所では、古代を中心に中世までを発掘調査の対象としてきた。北山氏によると、今回の近代の遺構の発掘調査は、文化庁から都道府県教育委員会へ1998(平成10)年9月29日付けで出された「通知」(ネットでも公開)に負うところが大きかったとのことである。この通知には「近現代の遺跡」を「地域においてとくに重要なもの」という条件付きであるが、埋蔵文化財として扱う範囲に含めるとの文言が記されている。

同庁が2022(令和4)年7月22日付で出した「これからの埋蔵文化財保護のあり方について」と題する報告書(第1次、ネットでも公開)では、高輪築堤跡の事例を取り上げ、埋蔵文化財保護の方策の検討が必要とした上で、「近代の遺跡」の把握と保護、さらには調査方法にまで踏み込んだ課題を提起している。

こうした近代の埋蔵文化財をめぐる動向は注目する必要がある。



写真1 旧国鉄奈良駅転車台の写真(檀原考古学研究所所蔵、撮影:二階堂達郎, 2024/1/12)



写真2 奈良駅転車台の展示(檀原考古学研究所所蔵、撮影:二階堂達郎, 2024/1/12)
転車台遺構の平面図と出土した煉瓦。



写真3 大阪電気軌道デポ1形前照灯の展示
(近畿日本鉄道所蔵、撮影:岡田広一, 2024/1/7)
石舞台古墳発掘(1933(昭和8)年~)で用いられた。

【出版物紹介】

『美しい絵葉書で訪ねる日本の橋』

(編著者：中元雄治)

「絵葉書で訪ねる橋」シリーズの「日本の橋」の最終版である。今回は趣向を変えて、「美しい絵葉書の橋」をテーマに江戸期の浮世絵から大正・昭和期の新版画、銅版画や道路や鉄道の開通記念など430葉を集めた。



(A4・52ページ、フルカラー、2024年1月20日発行)
代金(1部)：1,300円、送料250円。支払方法：切手
申込・問い合わせ先：[E-mail] y52749n@yahoo.co.jp

学会誌の電子ジャーナル公開について

科学技術振興機構(JST)より提供された2023年10～12月分のアクセス統計(クローラーによるアクセスを除外)の概要です。

- 2023年10月(公開論文数:26) :
書誌事項へのアクセス数:合計 317回
全文PDFへのアクセス数:合計 364回
(アクセス数が最も多かった論文:書誌事項;37回, 全文PDF;43回)
- 2023年11月(公開論文数:26) :
書誌事項へのアクセス数:合計 382回
全文PDFへのアクセス数:合計 533回
(アクセス数が最も多かった論文:書誌事項;48回, 全文PDF;188回)
- 2023年12月(公開論文数:26) :
書誌事項へのアクセス数:合計 201回
全文PDFへのアクセス数:合計 370回
(アクセス数が最も多かった論文:書誌事項;28回, 全文PDF;45回)

2023年度第4回役員会議事録

日時: 11月8日(水), 19:00~20:30, オンライン開催
参加者: 中山会長, 岡田副会長, 貝柄幹事, 寺島幹事, 二階堂幹事, 溝口幹事, 若林幹事
議事:

1. 前回役員会議事録の承認
2. 2023年度年次大会
開催日: 12月2日(土). 会場: 京都市国際交流会館 第4会議室.
特別講演会: 「鴨川運河の誕生 ~京と伏見をつなぐ水的路~」久岡道武氏(琵琶湖疏水記念館学芸員).
見学会: 京阪電鉄「墨染」駅集合, 見学先: 伏見インクライン, 墨染発電所, 琵琶湖疏水記念館特別展「鴨川運河の誕生」
3. 見学会
「はがね歴史記念館の見学会」(11月1日(水))
参加者数; 20名(オプション見学は18名)
次回見学会: 淡河疏水, 神戸港クルーズ, 旧住友倉庫(神戸新港)が候補に挙がる.
4. 2024年度総会開催・議案議決方法
日程: 2024年4月20日(土), 13:30開始.
5. 学会誌18号原稿
申込締切日: 論文(査読付)2023年12月31日, 論文以外2024年2月28日.
6. 学会誌17号原稿
掲載予定原稿(敬称略): 安田(提出), 二階堂・貝柄(提出), 寺島(提出), 中山(作成中).
7. 学会誌電子ジャーナル公開(報告)
8. ニュースレター135号
11月上旬に発行予定.
9. 調査・研究について(報告)
10. その他
次回役員会: 2024年1月10日(水), 19:00~

入会者

(敬称略, ◇: 関心のある分野)

久岡 道武(ヒサオカ ミチタケ)
◇近現代における地方産業やインフラの歴史

2024年2月5日発行
編集 近畿産業考古学会 編集委員会
発行 近畿産業考古学会 会長 中山嘉彦
URL: <http://kinias.jp>
事務局 564-8511 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号
大阪学院大学 経済学部 中山嘉彦研究室気付
Tel: 06-6381-8434(代), Fax: 06-6382-4363(代)
E-mail: kinias-ec@nifty.com
会費納入先(郵便振替)
口座番号: 00950-9-150085, 加入者名: 近畿産業考古学会